軍神の変容

―中国古代に於ける戦争論の展開と蚩尤像―（1）

湯浅邦弘

序言

黄帝は、中華民族の始祖として、また、あらゆる事物の創始者として、五帝の筆頭に位置付けられる古代帝王である。その黄帝が嘗て大きな試練に遭遇した。軍神蚩尤（しゆう）との戦いである。

武器を創り兵乱を興して黄帝に挑んだ蚩尤は、大暴風雨や濃霧によって黄帝を苦戦に陥れる。黄帝は、応龍・玄女の助力によって暴風雨を鎮め、濃霧の中を自在に走る指南車を駆使して反撃に転じ、遂に涿鹿の野に於て蚩尤を捕え誅殺したという。

この黄帝・蚩尤の戦いは、中国世界を大きく二分したというその規模に於て、また、これによって黄帝の天下統一が実現したとされる点に於て、正に中国の神話世界を代表する最初にして最大の戦争であったと言えよう。

『山海経』『史記』等に記されるこの黄帝・蚩尤の神話・伝説については、これまで主として黄帝伝説の解明という観点から研究が進められてきた。そして、そこでは、諸文献に記される黄帝像・蚩尤像を手掛かりに、その原初的形態の復元が試みられ、また一方、その原初の姿が後世の合理化・人間化・歴史化等によって変形されたと説かれてきた。

例えば、楊寛は、黄帝の原初的形態を皇天上帝、蚩尤の原初的形態を悪神と推測した上で、両者の戦いの意味を次の如く解説する。蚩尤は炎帝を滅ぼした後、自ら炎帝の称を襲用した。即ち、『史記』五帝本紀に記される黄帝・炎帝の戦（阪泉の戦）と黄帝・蚩尤の戦（涿鹿の戦）[1]とは、本来同一の事象が分化したものである。そして、この炎帝から黄帝への帝王交替劇は、平和の時代から戦争の時代への大きな変化を象徴している、と。

また、孫作雲は、黄帝を、熊トーテムを崇拝する西北部族の象徴、蚩尤を、蛇トーテムを崇拝する東南部族の象徴と捉え、更に、玄珠は、黄帝を善神、蚩尤を巨人族の悪者とするなど、その見解は多種多様である。そこで、右の三者を含め、この黄帝・蚩尤の戦いに関する従前の研究を表1（次頁）にまとめてみる。

このように、黄帝・蚩尤の戦をめぐる見解は、研究者個々の基本的視点を反映する形で多方面から種々提出されてきたという状況である。

島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第二十六巻　一一五頁～一三一頁　平成四年十二月

表1　黄帝・蚩尤の原初的形態およびその戦いの意味（先行研究の解釈、出拠は一一八頁参照）

研究者	黄帝	蚩尤	黄帝・蚩尤の戦の意味、その他
①楊寛	皇天上帝	悪神	蚩尤は炎帝を滅ぼした後、自ら炎帝の称を襲用。黄帝・炎帝の戦と黄帝・蚩尤の戦、阪泉の戦と涿鹿の戦とは本来同一事の分化。炎帝から黄帝への帝王交替は、平和から戦争の時代への変化を象徴。
②孫作雲	熊トーテムを崇拝する西北部族	蛇トーテムを崇拝する東南部族	蚩尤は善戦し、のちに兵器の発明者とされる。蹴鞠の戯、咸池の楽は、黄帝・蚩尤の戦に起源あり。夏禹は蚩尤の苗裔。
③玄珠	善神	巨人族・悪者	『漢書』芸文志に『蚩尤』二巻、『隋書』経籍志に『黄帝蚩尤兵法』が記載される。蚩尤神話の完全な逸亡は隋代以降。
④森三樹三郎	皇帝	斉地方の戦争神	『史記』の黄帝神話は、五行説の成立・流行以後。周・斉の政治権力関係（周王朝の成立）を反映。蚩尤＝炎帝。
⑤水野清一		悪神・疫病神・軍神	蚩尤は悪神・疫病神と軍神という両面の性格を持つ。蚩尤伎は饕餮伎の名残。
⑥森安太郎	始神始帝。龍蛇・雷雨の神	蝮	黄帝が炎帝（姜姓）に戦勝したのと同様、田氏斉（高祖黄帝）が姜姓斉（炎帝・兵神蚩尤）の信仰に一撃を加える為に作為した伝説。涿鹿とは、独山（山東省）の麓。
⑦丁山	皇天上帝	赤色長蟲。天に在りては炎帝、地に在りては南海の帝で戦神。	『左伝』所伝の阪泉の戦は、『帰蔵』のいう涿鹿の戦と同一。『大戴礼記』は蚩尤を「庶人」としているが、『尚書』呂刑・湯誥、『逸周書』嘗麥などの古代文献によれば、一部族の大酋長であり、決して平民ではない。
⑧袁珂	中央の上帝	勇猛な巨人族、天上の悪神。炎帝の後裔で南方に居住。	蚩尤は老祖父炎帝の称を襲用。黄帝との戦いに敗れた炎帝の復讐戦を行なう。黄帝との戦に劣勢の蚩尤は、北方の巨人族・夸父（蚩尤同様炎帝の末裔）の救援を仰ぐも結局敗死。饕餮紋様は、実は飽くことを知らぬ貪欲な蚩尤の形象。
⑨貝塚茂樹	ともに、風を支配する神。ふいご技術を身に付け青銅兵器の製造を知る部族の長。		戦闘の勝敗の鍵が風を自由にする巫女を獲得できるか否かにあった点において、古代メソポタミアのマルドゥクのティアマト伝説と一致。

⑩白川静	中原の帝	東方の帝。ツングース系か？風神・悪神としての性格。	蚩尤が黄帝と戦い敗れたというのは、黄帝説話によって創作されたもの。その部族の中原よりの敗退を語る。黄帝説話の成立とともに、蚩尤の説話は敗北の神話として残る。	
⑪御手洗勝	嬴姓族の水神	悪神	黄帝と龍との密接な関係、特に黄帝の武器であった應龍が「水を蓄え」て強敵の蚩尤に対抗したという伝承は、水神としての黄帝の本質を露呈するもの。	
⑫何新	太陽神・月神・人類神を兼ねる最高神	南方、苗黎蛮人の首領。炎帝（火神）の重臣。	蚩尤は炎帝を駆逐して自ら炎帝と称す。炎帝・黄帝（北方部族の長）は連合して蚩尤に戦勝し、黄帝が炎帝・黄帝二族の領袖として「大帝」と称す。	
⑬陳天水	天帝。万物の主宰者。のちに人帝に転化	炎帝の末裔。嘗て黄帝属下の臣下。	「共工・顓頊の戦」「刑天・天帝の戦」「黄帝・炎帝の戦」「黄帝・蚩尤の戦」は皆、原始社会末期に於ける部族間の対立・抗争を反映。黄帝・蚩尤の戦は、正義の自衛者と不正義の侵略者との戦闘。	
⑭劉城淮	雲族の戦神、夏華族の祖先	一種の虫。トーテムとなる。九黎族（東方）の神。	華夏族（雲族）の創作した神話。原始社会末期の部族・国家間の戦争、即ち華夏族が東方の九黎族を抗撃した事実を反映。正義（黄帝）が不正義（蚩尤）に勝利するという人民の理想を表明したもの。蚩尤と楡罔・炎帝の戦は、黄帝・蚩尤の戦の前哨戦として創作されたもの。蚩尤が炎帝の子孫であるというのは、後人の附託。	
⑮馬清福	炎帝の兄弟、正義の部族長	炎帝の後裔。	遠古時代の両部族間の戦争を反映。黄帝は正義、蚩尤は邪悪凶残の侵略者を代表。二つの形象中に古代人の正義に対する賛美、邪悪に対する痛恨が託されている。	
⑯張振犁	皇帝	悪勢力の部族長	原始社会に於ける部族間の重大歴史事件。黄帝の歴史的地位を決定づけた戦い。黄帝に関する神話は『史記』から顕著に変化（伝説化・歴史化）。これら中原に於ける黄帝神話は、歴代帝王および儒家・史家によって宣伝・附会されたもの。	
⑰徐顕之	北方部族の長	南方部族の長	南北両大勢力の対立激闘を反映。	
⑱王孝廉	火神	水神	火神と水神との戦い。『山海経』大荒東経に於て、応龍が蚩尤・夸父を殺したとされるのは、夸父にも風神雨神としての性格があるから。	

表1 出拠一覧

①楊寛「黄帝与皇帝」（『古史辨』第七冊「中国上古史導論」、一九三八年）
②孫作雲「蚩尤考」（『中和月刊』二、四、五、一九四一年）
③玄珠『支那の神話』（玄珠『中国神話研究ＡＢＣ』上海世界書局一九二九年刊の翻訳、伊藤彌太郎訳、地平社、一九四三年）
④森三樹三郎『支那古代神話』（大雅堂、一九四四年、のち『中国古代神話』として再版）
⑤水野清一「漢の蚩尤伎について—武氏祠画像の解—」（『京都大学人文科学研究所創立二十五周年記念論文集』、一九五四年）
⑥森安太郎「黄帝伝説」（『京都女子大学紀要』十八、一九五九年、のち一九七〇年、京都女子大学人文学会より『黄帝伝説—古代中国神話の研究—』として刊行）
⑦丁山『中国古代宗教与神話考』（上海文芸出版社、民俗・民間文学影印資料之十四、一九六一年、影印本一九八八年）
⑧袁珂『中国古代神話』新版（商務印書館一九五七年刊の翻訳、伊藤敬一ほか訳、みすず書房、一九七一年）
袁珂『山海経校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）
袁珂『中国神話伝説詞典』（上海辞書出版社、一九八五年）
袁珂「巨人—斉魯神話与仙話的芸術概括」（『思想戦線』一九九一年第四期）
⑨貝塚茂樹「神々の誕生」（『貝塚茂樹著作集』第五巻［中央公論社、一九七六年］所収、初出は筑摩書房、一九六三年）
⑩白川静『中国の神話』（中央公論社、一九五七年、のち一九八〇年、中公文庫として刊行）
⑪御手洗勝『古代中国の神々』（創文社、一九八四年、初出は「黄帝伝説について」『広島大学文学部紀要』二七巻一号、一九六七年）
⑫何新『諸神的起源』第十章「火神炎帝与涿鹿之戦」（生活・読書・新知三聯書店、一九八六年）
⑬陳天水『中国古代神話』（上海古籍出版社、中国古典文学基本知識叢書、一九八八年）
⑭劉城淮『中国上古神話』（上海文芸出版社、一九八八年）
⑮馬清福主編『秦漢神異』「帝擒蚩尤」所収（遼寧大学出版社、白話古代志怪故事研究叢書、一九九一年）
⑯張振犁『中原古典神話流変論考』所収「黄帝神話的伝説和歴史化」（上海文芸出版社、一九九一年）
⑰徐顕之『山海経探原』（武漢出版社、一九九一年）
⑱王孝廉『中国的神話世界』（作家出版社、一九九一年）

しかしながら、これらの研究に共通する問題点として、次のような諸点を指摘することができるであろう。第一は、この神話の原初的形態や意味を探求せんとする作業が、既にかなりの合理化・人間化を経たとされる諸資料に依らざるを得ないという点である。従って、表1の如く、その諸見解は、多種多様で各々に興味深いと評価し得る反面、全資料を整合的に解釈し得るには至らず、互いに決め手を欠いたまま乱立しているようにも見える。第二は、黄帝・蚩尤の戦いが主として黄帝神話解明の一環として取り上げられる結果、どちらかと言えば黄帝の側に力点が置かれ、蚩尤への注目が今一つ疎略になっている点である。また第三に、蚩尤が軍神として祭祀される事実に言及しながら、資料として、肝心の

軍事思想関係の文献を取り上げないままになっているのも、資料上の大きな問題点であると思われる。[2] 更には第四に、蚩尤の側に注目する際、蚩尤「作兵」伝説を前提として、蚩尤を、兵乱を興し黄帝に敵対した悪者と捉える場合がほとんどであるが、実は、この蚩尤作兵伝説については、必ずしもそれを前提としない立場、或いはその作兵伝説を明確に否定する立場も存在するのである。

従って、黄帝・蚩尤の原初的形態を復元せんとする作業は、旧来の諸資料に依る限り、依然としてやや困難な状況にあると言えるものの、他方、諸文献、特に軍事関係文献を手掛かりとした軍事思想史上に於ける軍神・蚩尤像の諸相やその展開を追究することは、残された大きな課題であると考えられ、また、そうした追究が逆に、従来の神話研究に新たな知見を加え得るのではないかと思われる。

そこで本研究では、中国古代に於ける軍事思想の展開という、これまでの神話研究には全く見られなかった新たな視点から、この黄帝と蚩尤とに注目し、特に軍事思想の展開と蚩尤像の変化との関係について考察を試みることとしたい。

なお、本稿では紙幅の関係上、この内、蚩尤に関する神話伝説を分析整理し、問題の所在を明確にすることを主な目的としたい。

一　『山海経』『龍魚河図』『史記』の蚩尤像

本章では先ず、黄帝・蚩尤の戦いに関する最も代表的な資料として、『山海経』『龍魚河図』『史記』の三者を挙げて比較し、関係資料を分析する際の有効な観点は何か、について検討してみたい。以下に関係部分を各々原文・書き下し文の順に掲げる。

①有係昆之山者、有共工之臺。射者不敢北鄉。有人衣青衣、名曰黄帝女魃。蚩尤作兵伐黄帝。黄帝乃令應龍攻之冀州之野。應龍畜水、蚩尤請風伯・雨師、縱大風雨。黄帝乃下天女曰魃、雨止。遂殺蚩尤。魃不得復上、所居不雨。叔均言之帝、後置之赤水之北。叔均乃爲田祖。魃時亡之、所欲逐之者、令曰、神北行。先除水道、決通溝瀆。

係昆の山なる者有り、共工の台有り。射る者敢て北鄉せず。人有り青衣を衣る。名づけて曰く黄帝女魃と。蚩尤兵を作りて黄帝を伐つ。黄帝乃ち応龍をして之を冀州の野に攻めしむ。応龍水を畜へ、蚩尤風伯・雨師に請ひ、大風雨を縱にす。黄帝乃ち天女の魃と曰ふを下す。雨止み、遂に蚩尤を殺す。魃復た上るを得ず、居る所雨ふらず。叔均之を帝に言ひ、後に之を赤水の北に置く。叔均乃ち田祖と為る。魃時に之より亡ぐ。之を逐はんと欲する所の者は、令して曰く、神北行せよと。先づ水道を除き、溝瀆を決通す。(『山海経』大荒北経)

②龍魚河圖曰、黄帝攝政前、有蚩尤、兄弟八十一人、並獸身人語、銅頭鐵額、食沙石子。造立兵杖・刀・戟・大弩、威振天下、誅殺無道、不仁不慈。万民欲令黄帝行天子事、黄帝仁義不能禁止蚩尤、遂不敵。乃仰天而歎、天遣玄女下、授黄帝兵信神符。制伏蚩尤、以制八方。蚩尤没後、天下復擾亂不寧。黄帝遂畫蚩尤形象、以威天下、天下咸謂蚩尤不死、八方万邦皆爲殄伏。

龍魚河図に曰く、黄帝政を摂る前、蚩尤有り、兄弟八十一人、並びに獣身人語、銅頭鉄額、沙石子を食らふ。兵杖・刀・戟・大弩を造立し、威天下に振ひ、無道を誅殺するも、不仁不慈。万民黄帝をして天子の事を行はしめんと欲するも、黄帝仁義ありて蚩尤を禁止する能はず、遂に敵せず。乃ち天を仰ぎて歎ずるに、天玄女をして下らしめ、黄帝に兵信神符を授く。蚩尤を制伏し、以て八方を制す。蚩尤没するの後、天下復び擾乱して寧からず。黄帝遂に蚩尤の形象を画きて、以て天下を威し、天下咸蚩尤死せずと謂ひ、八方万邦皆為に殄伏す。（『太平御覧』巻七十九引く『龍魚河図』）

③軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸侯咸来賓従。而蚩尤最為暴、莫能伐。炎帝欲侵陵諸侯、諸侯咸歸軒轅。軒轅乃修徳振兵、治五氣、蓺五種、撫萬民、度四方、教熊羆貔貅貙虎、以與炎帝戰於阪泉之野。三戰、然後得其志。蚩尤作亂、不用帝命。於是黄帝乃徵師諸侯、與蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤。而諸侯咸尊軒轅為天子、代神農氏。是為黄帝。天下有不順者、黄帝從而征之、平者去之、披山通道、未嘗寧居。

軒轅の時、神農氏の世衰ふ。諸侯相侵伐し、百姓を暴虐するも、而して神農氏征する能はず。是に於て軒轅乃ち干戈を習用し、以て不享を征し、諸侯咸来りて賓従す。而して蚩尤最暴を為し、能く伐つこと莫し。炎帝諸侯を侵陵せんと欲し、諸侯咸軒轅に帰す。軒轅乃ち徳を修め兵を振ひ、五気を治め、五種を蓺へ、万民を撫し、四方を度り、熊羆貔貅貙虎に教へ、以て炎帝と阪泉の野に戦ふ。三たび戦ひ、然る後に其の志を得。蚩尤乱を作し、帝命を用ひず。是に於て黄帝乃ち師を諸侯に徴し、蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、遂に蚩尤を禽殺す。而して諸侯咸軒轅を尊びて天子と為し、神農氏に代らしむ。是れ黄帝為り。天下順はざる者有らば、黄帝従りて之を征し、平ぐれば之を去り、山を披きて道を通じ、未だ嘗て寧居せず。（『史記』五帝本紀）

この三者を、その成立状況・成立時期等の問題を一応除外して比較す

表2　皇帝・蚩尤神話の比較（『山海経』『龍魚河図』『史記』）

項目	①『山海経』大荒北経	②『龍魚河図』	③『史記』五帝本紀
基本的構造	地理解説、干魃起源譚に包括される。黄帝・蚩尤の戦い自体が主題ではない。	黄帝による中国統一を齎した重大事件。黄帝・蚩尤が拮抗関係にある。	神農から黄帝に至る古代聖王の中国社会統一の過程の一つ。黄帝・蚩尤の戦の前に、炎帝・黄帝の戦あり。
神話的要素	濃厚。天女、応龍、風伯、雨師などが登場。その戦いも風雨・干魃によって勝敗が決する。	蚩尤の側に濃厚。しかし、黄帝は人間化され、両者の戦いも合理化・歴史化されている。	稀薄。黄帝・炎帝・蚩尤とも人間として描かれ、その戦いも政治的。

黄帝像	人間か神か明確ではないが、応龍を使い女魃を天より遣わす。	人間社会の帝王。仁義の心。民の推挙により天子の位に就く。初め蚩尤に敗北して天を仰ぎ、天の助力を得る。	人間社会の形成（諸制度の整備や民の教化）に奔走した帝王。自ら武力を行使して諸侯を征服し、推されて天子となる。
蚩尤像	風雨水に関する神的性格。作兵者。風伯や雨師の助力を得て黄帝を苦しめるが、女魃に風雨を止められ遂に敗死する。	「獣身人語、銅頭鉄額、食沙石子」という半獣半人的性格。兄弟が八十一人。武器の創造者。不仁不慈。万民の支持を得られず黄帝に誅殺される。死後その形象が天下を威圧。軍神として畏怖畏敬の対象となる。	暴虐の諸侯。兵乱を興し黄帝に従わず誅殺される。黄帝伝説の脇役的存在。
戦乱の原因と武力行使	蚩尤が兵乱を興す。風伯・雨師の助力を得た風雨による戦い。武器の使用は不明確。	蚩尤が武器を創始し、天下を威圧。黄帝は天（玄女）から授かった兵信神符により漸く勝利。	暴虐の諸侯蚩尤が黄帝の命に従わなかった。戦争の開始や武器の創始が蚩尤によるかどうかは不明。神農の時代から諸侯は相侵伐しており、また、黄帝も干戈を習用し「振兵」している。蚩尤との戦いに際しては、諸侯から徴兵。
戦争の場所	冀州の野。	未詳。	涿鹿の野。
天人関係	密接。黄帝が天より女魃を下して蚩尤に勝利するも、女魃は再び昇天することができず、干魃の起源となる。	密接。蚩尤に苦戦する黄帝は天を仰ぎ、天は玄女を派遣して黄帝に兵信神符を授与。人に対する天の優位が顕著。	天人の直接的関係は見られず。人間世界の支配者が「天子」と称される。
思想的特色		儒家の「仁義」。「天」の思想	「治五気」「蓺五種」という気の思想、五行思想。「修徳」という儒家的思想。

れば表2の如くになる。先ず三者の大きな相違点としては、『山海経』では濃厚である神話的要素が、『龍魚河図』では蚩尤の側のみに限定され、『史記』ではほとんど稀薄になっているという点を挙げることができる。それは、表2の如く、三者の描く黄帝像・蚩尤像にも、また戦乱の原因と武力行使の状況にもほぼ反映されていると思われる。[3] 更に、天人の関係についても、『山海経』『龍魚河図』では密接な相互関係が認められるのに対して、『史記』では直接的関係が認められず、代わりに、気の思想、五行思想、儒家的思想等を看取し得るなど、神話的要素の減退と入れ代わりに合理化人間化が増進している状況が明らかである。但しそれは、三つの文献の資料的性格や成立時期が異なる以上、当然の現象とも言えるであろう。

しかし、一方で、この三者には、そうした事情を越えてなお共通する点も存在する。それは、蚩尤が「作兵」して黄帝に戦いを挑み、遂には黄帝に誅殺されたという点、蚩尤は最終的には黄帝に敗退するものの、身分・力量とも黄帝に匹敵し得る存在（『龍魚河図』や『史記』では諸侯など高位の為政者）であったという点である。これらは、個々の文献上の相違を越えた基本的構造に関わる共通点であると言えよう。

従って、黄帝・蚩尤の戦いに関する諸資料を比較検討する際、ある程度の共通項を設定しておくことが、個々の資料の特質を見出だす有力な手段になると思われるが、この蚩尤「作兵」と蚩尤の地位という二点は、その最も有効な観点になるのではないかと予測される。以下では、この二つの観点を手掛かりに、関係資料を分析して行くこととしたい。

二　蚩尤と「作兵」

多くの神話伝説は、蚩尤を「作兵」者であるとしている。本章では先ず、この蚩尤と「作兵」との関係に注目しつつ、関係資料を表3にまとめながら分析してみる。

表3　蚩尤「作兵」について

「作兵」とその真偽	資料（出典）
(1)兵乱を興す＝興乱	①有係昆之山者、有共工之臺。射者不敢北鄉。有人衣青衣、名曰黄帝女魃。蚩尤作兵伐黄帝。黄帝乃令應龍攻之冀州之野。應龍畜水、蚩尤請風伯・雨師、縱大風雨。黄帝乃下天女曰魃、雨止。遂殺蚩尤。魃不得復上、所居不雨。叔均言之帝、後置之赤水之北。叔均乃爲田祖。魃時亡之、所欲逐之者、令曰、神北行。先除水道、決通溝瀆。（『山海経』大荒北経）
(2)兵器を作る＝造兵	②秦始皇之時、十五年彗星四見、久者八十日、長或竟天。其後秦遂以兵滅六王、并中国、外攘四夷、死人如亂麻、因以張楚並起、三十年之間、兵相駘藉、不可勝數。自蚩尤以来、未嘗若斯也。（『史記』天官書） ③炎帝氏衰、蚩尤惟始作亂、赫其火燀、以逐帝、帝弗能征。（『路史』後紀五・黄帝紀） ④龍魚河圖曰、黄帝攝政前、有蚩尤、兄弟八十一人、並獸身人語、銅頭鐵額、食沙石子、造立兵杖・刀・戟・大弩、威振天下。

	（『太平御覧』巻七十九引『龍魚河図』）
	⑤黄帝問於伯高曰、吾欲陶天下、而以為一家、為之有道乎。……修教十年、而葛盧之山、發而出水、金從之、蚩尤受而制之、以為劍鎧矛戟。是歳相兼者、諸侯九。雍狐之山、發而出水、金從之、蚩尤受而制之、以為雍狐之戟芮戈。是歳相兼者、諸侯十二。故天下之君頓戟一怒、伏尸滿野、此見戈之本也。（『管子』地数）
	⑥蚩尤造五兵、與黄帝戰、故流血百里也。（『荘子集釈』引成玄英疏）
	⑦蚩尤、神農時諸侯、始造兵者也。（郭慶藩『荘子集釈』）
(3)刑罰を作る＝作刑	⑧王曰、若古有訓、蚩尤惟始作亂、延及于平民、罔不寇賊・鴟義・姦宄・奪攘・矯虔。苗民弗用靈、制以刑、惟作五虐之刑曰法、殺戮無辜、爰始淫為劓刵椓黥、越茲麗刑、并制罔差有辭。……庶戮方告無辜于上。……皇帝哀矜庶戮之不辜、報虐以威、遏絶苗民、無世在下（『尚書』呂刑）
	⑨夫穆王之治、初亂終治、非知昏於前、才妙於後、前任蚩尤之刑、後用甫侯之言也。（『論衡』非韓）
	⑩案前世用刑者、蚩尤・亡秦甚矣。蚩尤之民、湎湎紛紛、亡秦之路、赤衣比肩、當時天下未必常寒也。（『論衡』寒温）
	⑪甫刑曰、庶僇旁告無辜于天帝。此言蚩尤之民被冤、旁告無罪于上天也。以衆民之叫、不能致霜、鄒衍之言、殆虚妄也。（『論衡』変動）
(4)「(初)作兵」説を前提とせず	⑫蘇秦始將連横、説秦恵王曰、……昔者神農伐補遂、黄帝伐涿鹿而禽蚩尤、堯伐驩兜、舜伐三苗、禹伐共工、湯伐有夏、文王伐崇、武王伐紂、齊桓任戰而伯天下。由此観之、惡有不戰者乎。（『戦国策』秦策一）
	⑬軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸侯咸来賓從。而蚩尤最為暴、莫能伐。炎帝欲侵陵諸侯、諸侯咸歸軒轅。軒轅乃修徳振兵、治五氣、蓺五種、撫萬民、度四方、教熊羆貔貅貙虎、以與炎帝戰於阪泉之野三戰、然後得其志。蚩尤作亂、不用帝命。於是黄帝乃徵師諸侯、與蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤。（『史記』五帝本紀）
(5)「作兵」説を否定	⑭三皇無為、天下以治、五帝行教、兵由是興、所謂大刑用甲兵、而陳諸原野、於是有補遂之戰、阪泉之師。（『通典』兵一、兵序）
	⑮人曰、蚩尤作兵。蚩尤非作兵也、利其械矣。（『呂氏春秋』蕩兵篇）
	⑯公曰、蚩尤作兵與。子曰、否。蚩尤、庶人之貪者也。及利無義、不顧厥親、以喪厥身。蚩尤惛欲而無厭者也。何器之能作。（『大戴礼』用兵篇）

蚩尤と「作兵」との関係は、おおよそ五種に分類し得ると思われるが、その第一は、「兵」を兵乱、第二は、「兵」を兵器とする立場である。但し、資料によっては、この両者を判然と分かち難い場合もあるので、以下では、この第一・第二の例を一括して検討することとしたい。

先ず、既に取り上げた『山海経』大荒北経では次のように描かれている。(4)

蚩尤作兵して黄帝を伐つ。黄帝乃ち応龍をして之を冀州の野に攻めしむ。応龍水を畜へ、蚩尤風伯・雨師に請ひ、大風雨を縱にす。黄帝乃ち天女の魃と曰ふを下す。雨止み、遂に蚩尤を殺す。（『山海経』大荒北経、表3①）

即ち、蚩尤が「作兵」したので黄帝は応龍に命じて攻めさせた。蚩尤は風伯・雨師の力を借りて大風雨を齎した。黄帝は天女魃を降して遂に蚩尤を殺した。魃は天上に帰れなくなり干魃の原因となった、という。

ここでの「兵」は兵乱あるいは兵器、いずれにも解釈し得る可能性を持つと思われる。ただ、いずれにしても、蚩尤が黄帝に対して戦争を仕掛けたのであり、黄帝はその悪者を誅伐したという構造に変わりはない。

次に、『史記』天官書には、以下の如く記されている。

秦始皇の時、十五年にして彗星四たび見はる。久しき者八十日、長きもの或は天に竟す。其の後秦遂に兵を以て六王を滅し、中国を并せ、外四夷を攘ふ。死人乱麻の如し。因りて以て張楚並びに起ち、三十年の間、兵相駘藉し、勝へて数ふ可からず。蚩尤自り以来、未だ嘗て斯くの若きものあらざるなり。（『史記』天官書、表3②）

ここで蚩尤は、秦及び秦滅亡時に於ける暴虐や争乱と一括されており、この場合の「兵」は明らかに兵乱であることが分かる。但し、これは飽くまで秦の「兵」について論評したものであり、蚩尤の「作兵」自体に言及したものではない。しかしいずれにしても、蚩尤は暴虐を働いた悪者と意識されている点に変わりはない。

また、『路史』後紀五・黄帝紀の記載も、明らかに「作乱」とする立場である。そこでは、「炎帝氏衰へ、蚩尤惟れ始めて乱を作し、其の火燀を赫して、以て帝を逐ひ、帝征する能はず」（表3③）と、蚩尤の行為が帝に対する初の「作乱」であったことを強調する。

次に、『龍魚河図』は、この「兵」を明らかに兵器とする立場の資料である。

龍魚河図に曰く、黄帝政を摂る前、蚩尤有り、兄弟八十一人、並びに獣身人語、銅頭鉄額、沙石子を食らふ。兵杖・刀・戟・大弩を造立し、威天下に振ひ、無道を誅殺するも、不仁不慈。万民黄帝をして天子の事を行はしめんと欲するも、黄帝仁義ありて蚩尤を禁止する能はず、遂に敵せず。乃ち天を仰ぎて歎ずるに、天玄女を遣はし、黄帝に兵信神符を授く。蚩尤を制伏し、以て八方を制す。（『太平御覧』巻七十九引『龍魚河図』、表3④）

右の如く、蚩尤は「兵杖・刀・戟・大弩を造立し」て天下を威嚇したとされており、この「兵」は明らかに兵器であることが分かる。

これと同様に、蚩尤と兵器との関係を説く資料に、『管子』地数篇がある。

黄帝伯高に問ひて曰く、吾天下を陶して以て一家と為さんと欲す。之を為すに道有るか。……教を修むること十年にして、葛盧の山、発して水を出し、金之に従ふ。蚩尤受けて之を制し、以て剣鎧矛

戟を為る。是の歳相兼ぬる者、諸侯九。雍狐の山、発して水を出し、金之に従ふ。蚩尤受けて之を制し、以て雍狐の戟芮戈を為る。是の歳相兼ぬる者、諸侯十二。故に天下の君戟を頓くして一たび怒れば、伏尸野に満つ。此れ戈を見るの本（始）なり。（『管子』地数、表3⑤）

ここで、蚩尤が黄帝の敵対者ではなく、黄帝の臣下とされている点は、上記の諸資料と異なるが、蚩尤が剣・鎧・矛・戟・芮戈の所謂五兵の創始者とされている点は、右の『龍魚河図』と類似している。

また、『荘子』盗跖篇の蚩尤伝説について、成玄英疏は、蚩尤を「五兵を（製）造」した者とし、また郭慶藩集釈は「始めて兵を造る者」と説いている（表3⑥⑦）[5]。

このように、右の諸資料は、「兵」を兵乱とするか兵器とするか、更にまたどちらとも解釈し得るかの相違はあるものの、いずれにしても蚩尤と「作兵」との関係を認めるという大枠に於て共通している。そして、そこでの蚩尤は、『管子』を除いて、いずれも戦争を起こした悪者として黄帝に誅伐される対象となっている。

次に「作兵」者の意味の第三として、過酷な刑罰を作り用いた者、即ち作刑者・用刑者とする立場がある。

王曰く、若れ古に訓有り。蚩尤惟れ始めて乱を作し、延く平民に及ぶまで、寇賊・鴟義・姦宄・奪攘・矯虔せざる罔し。苗民霊を用ゐずして、制するに刑を以てし、惟れ五虐の刑を作りて法と曰ひ、無辜を殺戮して、爰な始めて淫いに劓刵椓黥を為す。茲に越んで刑を麗（施）き、差罔きと辞有るとを并せ制す。……庶戮方く無辜を上に告ぐ。……皇帝庶戮の不辜を哀矜し、虐に報いるに威を以てし、苗民を遏絶して、世々下に在る無からしむ。（『尚書』呂刑、表3⑧）

この『尚書』呂刑では、前記の『路史』同様、「蚩尤惟れ始めて乱を作す」とあることから、基本的には分類の第一の意味、即ち「兵乱」と解釈し得るかの如くである。ところがその直後に、「惟れ五虐の刑を作りて法と曰ふ」とあることから、この「乱」の実態が、過酷な刑罰を作って無辜の民を殺戮したということであることが判明する。

こうした蚩尤像を伝える資料として、他に『論衡』がある。先ず、次の非韓篇では、周の穆王がその統治の初めに用いた刑罰の名として「蚩尤の刑」を挙げている。

夫れ穆王の治、初め乱れて終り治まるは、知前に昏く、才後に妙なるに非ざるなり。前に蚩尤の刑に任じ、後に甫侯の言を用ふるなり。（『論衡』非韓、表3⑨）

また、寒温篇では、蚩尤は「亡秦」と並列関係に置かれ、共に過酷な刑を用いた者の代表とされている。

案ずるに、前世の刑を用いる者、蚩尤・亡秦甚だし。蚩尤の民は、湎湎紛紛、亡秦の路は、赤衣比肩するも、当時の天下は未だ必ずしも常には寒からざるなり。（『論衡』寒温、表3⑩）

また、変動篇では次の如く、蚩尤の民は濡れ衣を着せられ、無実を上帝に訴えたとされる。

甫刑に曰く、庶僇、無辜を天帝に旁告すと。此れ蚩尤の民冤せ被れ、無罪を上天に旁告するを言ふなり。衆民の叫を以てすら、霜を致す能はざれば、鄒衍の言、殆ど虚妄なり。（『論衡』変動、表3⑪）

これらの資料が伝える蚩尤は、先の『尚書』呂刑と同じく、過酷な刑罰を用いて民を苦しめる為政者であると言えよう。

さて、以上の三つの立場は、「作兵」の具体的内容を「興兵」（兵乱を興す）とするか、「造兵」（兵器を造る）とするか、「作刑」（刑罰を作る）とするかの相違はあるものの、いずれも蚩尤と「作兵」との関係を認め、また、蚩尤を、黄帝に敵対し遂には誅殺される暴虐者とする点に於て概ね共通すると思われる。

ところが、これに対して、蚩尤と「作兵」との関係をそれほど強く認めない立場も存在する。次にこれを第四の立場として検討する。資料として掲げるのは、先ず『戦国策』秦策である。

蘇秦始め将に連横せんとし、秦の恵王に説きて曰く、……昔者神農は補遂を伐ち、黄帝は涿鹿に伐ちて蚩尤を禽にし、堯は驩兜（かんとう）を伐ち、舜は三苗を伐ち、禹は共工を伐ち、湯は有夏を伐ち、文王は崇を伐ち、武王は紂を伐ち、斉桓戦に任じて天下に伯たり。此に由りて之を観れば、悪んぞ戦はざる者有らんや。（『戦国策』秦策一、表3⑫）

右の如く、蚩尤は、神農に討たれた補遂、堯に討たれた驩兜、舜に討たれた三苗、禹に討たれた共工などと並列関係に置かれるに過ぎず、また仮にこの記載の順序に従えば、神農と補遂の争いが「作兵」の起源ということになる。これは、黄帝と蚩尤との戦いが中国世界を二分する初の大戦であり、しかも蚩尤こそが「作兵」者であったとする前記の諸資料とは、やや立場を異にすると言えよう。

また、『山海経』大荒北経としばしば比較される『史記』五帝本紀の記載も、先述の如く、黄帝・蚩尤の戦い、黄帝による蚩尤の誅殺という点では、基本的に『山海経』と類似するものの、表2で比較した如く、『史記』には、黄帝・炎帝・蚩尤が人間として描かれており、應龍・女魃・風伯・雨師が登場せず、暴風雨や干魃に関する要素が見えないなど、全体的に合理化・人間化が見える、などの相違点も存在する。

更に、『史記』では、「炎帝諸侯を侵陵せんと欲し、諸侯咸軒轅に帰す。……以て炎帝と阪泉の野に戦ふ。三たび戦ひ、然る後に其の志を得。蚩尤乱を作し、帝命を用ひず。是に於て黄帝乃ち師を諸侯に徴し、蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、遂に蚩尤を禽殺す」（表3⑬）と、黄帝・蚩尤の戦いの前に、黄帝・炎帝の戦いが記されており、また、確かに蚩尤が「作乱」したとされてはいるものの、それ以前に黄帝が「軒轅乃ち干戈を習用し、以て不享を征」したとされるなど、『山海経』等に於ける蚩尤作兵の立場とやや異なる記述がなされている。

また同様に、蚩尤と「作兵」との関係をそれほど強く意識しないものとして、やや時代は下るが、『通典』の記載を挙げることができる。

三皇無為にして、天下以て治まる。五帝教へを行ひ、兵是れ由り興る。所謂大刑は甲兵を用ひ、而して諸を原野に陳ね、是に於て補遂の戦、阪泉の師有り。（『通典』兵一、兵序、表3⑭）

ここでは、三皇の時代に戦争はなく、戦争の開始は五帝の時代からとされているが、右の『戦国策』や『史記』同様、黄帝と蚩尤との戦いが初の大戦とはされていない。「阪泉の師」即ち黄帝・炎帝の戦いの前に、「補遂の戦」即ち神農の戦いがあったと説かれているのである。これらの資料は、前記の一～三とは異なり、蚩尤と「作兵」との関係をそれほど緊密に意識していないと言えよう。

最後に第五として、蚩尤と「作兵」との関係を明確に否定する立場を

取り上げる。先ず、『呂氏春秋』蕩兵篇には、「人曰く、蚩尤作兵すと。蚩尤作兵するに非ざるなり。其の械を利するのみ」（表3⑮）との記載が見える。即ち、蚩尤作兵を説く或者に対して、蕩兵篇の編者は、蚩尤は武器を創造したのではなく、既に存在していた「械」をより鋭利な武器に改造しただけだと説く。ここでの「兵」は武器・兵乱であることが分かるとともに、ほとんどの蚩尤神話に於て大前提とされている蚩尤作兵が真っ向から否定されていることも判明する。

また、これと類似の立場を示すのが、『大戴礼記』用兵篇である。

公曰く、「蚩尤兵を作せしか」。子曰く、「否。蚩尤は庶人の貪者なり。利に及んで義無く、厥の親を顧みず、厥の身を喪ふ。蚩尤は惛慾にして厭くこと無き者なり。何の器か之れ能く作さんや。

（表3⑯）

用兵篇は右の如く、魯の哀公と孔子の問答を記す。哀公は、蚩尤が兵器を創作したとの通説について質問し、孔子はそれに答えて、「何の器か之れ能く作さんや」と述べている。即ち、ここでも、蚩尤による「作兵」が明確に否定されているのである。

以上、種々の蚩尤関係資料を取り上げ、「作兵」に対する見解の相違を中心に検討してきた。多くの蚩尤神話伝説は、その細部の相違を別とすれば、蚩尤と「作兵」との関係を大前提とする点に於て類似する。兵器を創造することと兵乱を勃発させることとは、ほとんど一連の行為とも考えられ、また、兵乱の具体的内容を、峻厳な刑罰の行使とすることも、そうした大前提を逸脱する程の相違ではないと思われる。ところが、そうした前提に必ずしも立脚しない資料も確かに存在し、特に『呂氏春秋』『大戴礼記』のみは、蚩尤作兵を明確に否定するという、全く異質な蚩尤観を示していたのである。

三　蚩尤の地位

次に第二の観点として、蚩尤の地位・身分に注目することとしたい。諸文献の記す蚩尤の地位・身分は表4（次頁）の如く、概ね四つに分類し得ると思われる。

先ず第一は、蚩尤を古の天子とする見解である。『史記』五帝本紀集解引く応劭の説、『荘子』盗跖篇の『集釈』引く『漢書音義』の説などがこれに相当する（表4①②）。また、先行研究の内、蚩尤と炎帝とを同一神（人）と見るものも、この立場に属すると言える。

第二は、蚩尤を、諸侯、或いは神農の臣・末裔とする立場である。先ず、『史記』五帝本義の「軒轅の時、神農氏の世衰ふ。諸侯相侵伐し、百姓を暴虐するも、而して神農氏征する能はず」（表4③）という記載に対して、『索隠』は「明かに庶人に非ず。蓋し諸侯の号なり」（表4④）と説き、『正義』引く孔安国は「九黎の君蚩尤と号す」（表4⑤）と説く。また、『会注考証』も「殷本紀引く湯誥に云う、昔蚩尤其の大夫と乱を百姓に作す」（表4⑥）とする。これらは、蚩尤を天子・帝王とはせず、諸侯の位とするものであろう。

これと同様に、『荘子』盗跖篇の「蚩尤」に対する『集釈』引く疏は「蚩尤は、諸侯なり。……蚩尤五兵を造り、黄帝と戦ふ。故に流血百里なり」（表4⑦）と説き、『集釈』は「蚩尤は、神農の時の諸侯、始めて兵を造る者なり」（表4⑧）とする。また、『戦国策』秦策の高誘注は、「蚩尤は、九黎の民（氏）の君子（兵を好むもの）なり」（表4⑨）と

説き、『太平御覧』巻七十二引く『世本』の「蚩尤作兵」に対する宋衷注は「蚩尤は、神農の臣」（表4⑩）とする。[6] また、『論衡』寒温・変動篇には、「蚩尤の民」という表現が見られ（表4⑪⑫）、これも蚩尤を諸侯とした上での記述ではないかと考えられる。更に、『逸周書』嘗麦解や『帝王世紀』の記述（表4⑬⑭）も、蚩尤を帝に反逆した諸侯としているように思われる。

第三は、蚩尤を黄帝の臣・相とするものであり、『管子』五行・地数篇、『韓非子』十過篇などがその代表である。

・昔黄帝蚩尤を得て天道を明らかにし、……蚩尤天道を明らかにす。故に当時為らしむ。（『管子』五行、表4⑮）

・黄帝伯高に問ひて曰く、吾天下を陶して以て一家と為さんと欲す。之を為すに道有るか。……教を修むること十年にして、葛盧の山、発して水を出し、金之に従ふ。蚩尤受けて之を制し、以て剣鎧矛戟を為る。是の歳相兼ぬる者、諸侯九。雍狐の山、発して水を出し、金之に従ふ。蚩尤受けて之を制し、以て雍狐の戟芮戈を為る。是の歳相兼ぬる者、諸侯十二。故に天下の君戟を頓（にぶ）くして一たび怒れば、伏尸野に満つ。此れ戈を見るの本（始）なり。（『管子』地数、表4⑯）

先ず、右の『管子』五行篇では、蚩尤は黄帝の臣下「当時」の官であるとされており、また、前章でも取り上げた地数篇では、黄帝のために武器を製造した臣下とされている。[7]

こうした黄帝の臣相としての蚩尤像は、この他『韓非子』十過篇などにも見える。

平公曰く、清角得て聞く可きか。師曠曰く、不可。昔者黄帝鬼神を泰山の上に合し、象車に駕して蛟龍を六にし、畢方鐺に並び蚩尤前に居り、風伯掃を進め、雨師道に灑ぎ、虎狼前に在り、鬼神後に在り、騰蛇地に伏し、鳳凰上を覆ひ、大いに鬼神を合して、清角を作為す。今主君徳薄く、之を聴くに足らず。之を聴かば将た敗有るを恐る。（『韓非子』十過、表4⑰）

ここで師曠は、太古の世に「清角」の楽を聴いた黄帝の侍者の一人として蚩尤を挙げている。また、これとほぼ同様の記述が『論衡』紀妖篇、『淮南子』泰族訓にも見える。

表4　蚩尤の地位について

地位	資料（出典）
(1)古の天子（＝炎帝）	①蚩尤、古天子（『史記』五帝本紀、『集解』引く応劭）
	②漢書音義云、蚩尤、古之天子。一曰庶人貪者。（『荘子』盗跖篇、『集釈』引く）
(2)諸侯あるいは神農の臣・末裔	③軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。（『史記』五帝本紀）
	④明非庶人、蓋諸侯號也。（同、『索隠』）
	⑤九黎君號蚩尤（同、『正義』引く孔安国）

⑥殷本紀引湯誥云、昔蚩尤與其大夫作亂百姓（同、『会注考証』）
⑦蚩尤、諸侯也。……蚩尤造五兵、與黄帝戰、故流血百里也。（『荘子』盗跖篇、疏）
⑧蚩尤、神農時諸侯、始造兵者也。（同、『集釈』）
⑨蚩尤、九黎民（氏）之君子（好兵）也。（『戰国策』秦策、高誘注）
⑩蚩尤、神農臣。（『太平御覧』巻七十二引く『世本』の「蚩尤作兵」に対する宋衷注）
⑪蚩尤之民、湎湎紛紛。（『論衡』寒温篇）
⑫甫刑曰、庶僇旁告無辜于天帝。此言蚩尤之民被冤、旁告無罪于上天也。（『論衡』変動篇）
⑬昔天之初、□作二后、乃設建典、命赤帝、分正二卿、命蚩尤于宇少昊、以臨四方。司□□上天未成之慶。蚩尤乃逐帝、爭于涿鹿之阿、九隅無遺。赤帝大懾、乃説于黄帝執蚩尤、殺之于中冀。以甲兵釋怒、用大正、順天思序、紀于大帝。相名之曰、絶轡之野。（『逸周書』嘗麦解）
⑭帝王世紀曰、神農氏衰、蚩尤氏叛、不用帝命。黄帝於是脩德撫民、…弦木爲弧、剡木爲矢、弧矢之利、以威天下。諸侯咸叛神農而歸之、討蚩尤氏。禽之于涿鹿之野。諸侯有不服者、從而征之、凡五十二戰、而天下大服。（『群書治要』巻十一注引く『帝王世紀』）

(3)黄帝の臣・相

⑮昔者黄帝得蚩尤而明於天道、……蚩尤明乎天道、故使爲當時。（『管子』五行）
⑯黄帝問於伯高曰、吾欲陶天下、而以爲一家、爲之有道乎。……修教十年、而葛盧之山、發而出水、金從之、蚩尤受而制之、以爲剣鎧矛戟。是歳相兼者、諸侯九。雍狐之山、發而出水、金從之、蚩尤受而制之、以爲雍狐之戟芮戈。是歳相兼者、諸侯十二。故天下之君頓戟一怒、伏尸満野、此見戈之本也。（『管子』地数）
⑰平公曰、清角可得而聞乎。師曠曰、不可。昔者黄帝合鬼神於泰山之上、駕象車而六蛟龍、畢方並鎋、蚩尤居前、風伯進掃、雨師灑道、虎狼在前、鬼神在後、騰蛇伏地、鳳皇覆上、大合鬼神、作爲清角。今主君德薄、不足聽之、聽之將恐有敗。（『韓非子』十過、ほぼ同様の記述が『論衡』紀妖篇、『淮南子』泰族訓にあり）

(4)庶人の貪者

⑱公曰、蚩尤作兵與。子曰、否。蚩尤、庶人之貪者也。及利無義、不顧厥親、以喪厥身。蚩尤惛欲而無厭者也。何器之能作。（『大戴礼記』用兵篇）
⑲一曰庶人貪者。（『荘子』盗跖篇、『集釈』）

さて、右の三つの立場は、天子・諸侯・臣相と、その身分にやや相違は見られるものの、いずれも蚩尤を高い地位にある為政者側の存在としている点にその共通点があると言えよう。

これに対して、第四の立場として注目されるのは、既に前章でも検討した『大戴礼記』用兵篇の見解である（表4⑱）。ここでは、蚩尤作兵の通説について質問する哀公に対して、孔子は、「否。蚩尤は庶人の貪者なり」と答えている。即ち、蚩尤作兵を否定する根拠として、蚩尤が単なる「庶人」であったことを挙げているのである。

これは、先の三つの立場がいずれも蚩尤を高位の為政者としていた点と大きく異なると言える。即ち、『大戴礼記』は、蚩尤と「作兵」との関係のみならず、蚩尤の地位・身分についても、通説とは全く異なる立場を取っているのである。

なお、この『大戴礼記』の見解は、『荘子集釈』引く『漢書音義』にも「蚩尤は、古の天子。一に曰く庶人の貪者」（表4⑲）の如く、或説として紹介されている。また、先に掲げた『史記索隠』が「明らかに庶人に非ず。蓋し諸侯の号なり」（表4④）と説くのは、こうした蚩尤庶人説を意識してのことかと推測される。

結　語

以上、本稿では、種々の蚩尤神話・伝説、及びそれに対する諸見解を、蚩尤と「作兵」との関係、蚩尤の地位・身分という二つの視点から分析してきた。その結果、多くの資料が大前提とする蚩尤作兵説を、『呂氏春秋』蕩兵篇・『大戴礼記』用兵篇のみは明確に否定していたことが明らかになった。また、蚩尤を高位の為政者であるとする通説に対して、『大戴礼記』用兵篇のみは、蚩尤を「庶人の貪者」とする特異な見解を示していた。このように、従来の神話研究に於てはほとんど取り上げられなかった軍事思想関係文献の中に、実は注目すべき特異な蚩尤観が存在していたのである。

ただ、戦争神として祭祀される蚩尤を、「蕩兵」篇や「用兵」篇という軍事思想を説く文献がともに否定的に取り扱うのは何故であろうか。また、『呂氏春秋』と『大戴礼記』という思想的性格の異なる文献に類似の蚩尤観が見えるのは何故か。また、『大戴礼記』のみが更に蚩尤を「庶人の貪者」に貶めているのは何故か。こうした大きな疑問が次々に生じてくる。

そこで次稿では、こうした課題を解決するために、特異な蚩尤観を示す『呂氏春秋』蕩兵篇、『大戴礼記』用兵篇に注目していくこととしたい。

注

(1) この詳細については、第一章、及び表2を参照。

(2) その点については次稿に於て詳述することとしたいが、たとえ取り上げたとしても、他の諸資料の蚩尤像と大きく異なるとの理由によって、その資料的価値を否定してしまう場合がほとんどである。例えば、表1⑦の丁山も、『大戴礼記』用兵篇に一応注目しながら、『尚書』や『逸周書』など他の古代文献の記述の方を尊重して、その蚩尤像を否定するに終わっている。

(3) もっとも、「熊羆貔貅貙虎」を文字通り動物・猛獣であるとすれば、

神話的要素も一部存在することになろう。しかしながら、それでは、政治的人間的要素の濃厚なこの一節の中で、この「熊羆貔貅貙虎」の部分のみが極めて不自然となり、既に『索隠』や『正義』も疑問視している。司馬遷が参照した原資料は文字通り猛獣の意であった可能性もあるが、ここではひとまず、「案、言教士卒習戰、以猛獸之名名之、用威敵也」とする『正義』の説に従っておきたい。

(4) 以下、資料は書き下し文によって示し、その原文は、表の中に記載した。書き下し文末尾の「表3①」などの記号が各々表中の番号に対応している。また、書き下し文、原文ともに、必要に応じて傍線を付す場合がある。

(5) このほか、次稿で検討する『呂氏春秋』蕩兵篇の引く或説や『大戴礼記』用兵篇の論評も、その後の議論の展開から判断して、この「兵」を兵器・兵乱とする立場と考えられる。

(6) 袁珂『山海経校注』は、この宋衷注を受け、「則所謂『蚩尤作兵伐黄帝』者、蓋黄炎門争、炎帝兵敗、蚩尤奮起以与炎帝復仇也」(『山海経校注』大荒北経)と説き、また、「應龍殺蚩尤与夸父者、蓋夸父与蚩尤同為炎帝之裔、在黄炎門争中、蚩尤起兵為炎帝復仇」(『山海経校注』大荒東経)と、蚩尤が炎帝の末裔であり、黄帝・蚩尤の戦いは、蚩尤による復讐戦であったと推測する。

(7) これについて、『漢書芸文志考証』も、「管子、『黄帝得蚩尤而明於天道』則黄帝六相亦有蚩尤」と、黄帝六相の一人としての蚩尤の存在を指摘する。

[付記]

本稿は、平成四年十月二十四日、愛媛大学に於て開催された戦国秦漢史研究会に於ける口頭発表の内容の一部をまとめたものである。この会に於て貴重な御意見を賜った諸賢に御礼申し上げたい。